24-02_54- 発想松田3P.qxd 24.1.12 11:21　ページ 54

Lesson 212　発想する！授業

生涯にわたって
社会のいたるところで学ぶための方法序説

個人と個人がつながる場づくりを！

※本連載、本誌ＨＰに無料掲載中！

松田 道雄

提案：個人と個人がつながり合える場づくりを、次年度事業の中に心がけてみませんか？

今年度も一年間の事業を振り返る時期になりました。読者の皆様は、それぞれ今年度ご担当事業についていかがでしたでしょうか？　筆者からは、新型コロナウイルス行動制限が解除された今年度を象徴する事業を一つ紹介します。

昨年末の12月5日、長野県伊那市で行われた、シニア世代が若い大学生もまじえて交流し合った体験事業です。事業名は、「だがしや楽校(がっこう)2023 in 上伊那～シニアのお宝博覧会」です。主催は伊那保健福祉事務所福祉課。長野県長寿社会開発センター伊那支部が共催し、実施されました。

水引細工、アレンジフラワー、自宅で栽培されている黒米のおすそ分け、人生の終活の動画、手作り絵本、商店街のミニチュア模型、紙芝居披露、レコード喫茶のデモンストレーション、…などなど個人の趣味や関心事を「見せ出し」形式で披露し合い、31の「見せ」と120名以上の参加者が集い、多彩な「見せ」を介して会話交流を楽しむ会が開かれました（写真1・2）。それらシニア世代の「お見せ出し」には、近くの長野県看護大学の学生皆さんも先生とともに「実習」として参加されました。

自由に交流を楽しむ時間の後、後半は、それぞれが今後どのようなことをしていきたいか、同じような思いを持つ人たちで小さな集まり（グループ）をつくって、これからしていきたいことについて談義しました（写真3）。

この体験会は、その場にいても、ライブの肌感覚から盛り上がりと熱気を味わいましたが、

写真１（2023年12月5日、ニシザワいなっせホール。以下同じ）

写真２

写真３

のちほど、メールでいただいた参加者のアンケートからも同じような感想を伺うことができました。

新型コロナウイルスによる行動制限の3年間を経て、4年ぶりに開かれたこのような対面交流の場が人々のエネルギーの開放の場になったことは、全国各地のイベントなどでも同じように見られたのではないかと思います。

ただ、皆が同じく見学するような祭りのイベントと異なり、この交流会は、個人と個人が「見せるもの」を介して会話し、気軽に交流し、つながり合うという姿が特徴です。近年、孤立を防ぐ意味で「つながりづくり」ということばが言われるようになっています。個人が孤立することを防ぎ、個人と個人がつながるためには、どのような場があったらいいのでしょうか？

ほとんどの人がスマホを持ち、若い世代だけでなく、大人やシニア世代も、LINEでやりとりしたり、誰か個人が投稿したYouTubeの動画をテレビで観たりするようになった現代社会に、コロナ感染対策として対面を避けてオンラインでやりとりすることも普通になった今、あらためて対面で集う意義を皆が考えるようになっています。

オンラインでできることはオンラインで行えるので、わざわざ時間をかけて集まり対面で行う必要性のあることは何なのか？ということです。それは、モノを介したやりとり、五感や手足を動かした体験などによって、人とのつながり、親密性、信頼性、協力性、助け合える関係性などを一層深めることなどでしょう（食事会なども

図1　これから私がしたいこと

A　自分の好きなことをさらに探求したい。
B　自分の好きなことで他地域の人と交流したい。
C　自分の好きなことで若い世代に教えたい。
D　自分の好きなことを活かして小商い（スモールビジネス）をしたい。
E　新たに好きなことを見つけたい。
F　このような場をつくる役割に関わりたい。

そうですね）。

その意味でも、個人と個人が楽しくゆるやかにつながり合えるような場としての今回の「シニアのお宝博覧会」は、これからに向けての象徴的な事業に思えました。

それを強く感じたのは、前半の「見せ出し交流会」（だがしや楽校）だけでなく、後半のグループワークに見られました。グループをつくる際に、これからの思いを図1の6つから選択してもらい、同じ思いの人どうしでグループをつくりました。読者の皆さんは、どれが多いと予想されるでしょうか？

実際に多かったのは、A、E、Fです。筆者が予想したのは、A、B、Dでしたので意外に思いました。特に、F「このような場をつくる役割に関わりたい。」という人が多かったのには、スタッフとうれしい驚きで目配せしました。

本号の始めに紹介すべきことでしたが、この事業を実現したのは、主催・共催のスタッフ皆さんのご尽力です。特に、その中心的プロデューサー役として、企画・立案・準備・実施を担われたのは、長野県長寿社会開発センター伊那支部シニア活動推進コーディネーターの藤井佳代さんです（藤井さんやスタッフの方々とは、半年以上前からメールやオンラインで筆者もやりとりさせていただきました。頭が下がります）。

「個人としてこのような場に参加したい」というだけでなく、「このような場をつくる側になってみたい」という方々が多かったのは、まさに藤井さんをはじめスタッフ皆さんの努力の賜物と思われますし、このような思いがある人々によって、各地に個人と個人がつながれる場ができたら、どんなに地域生活が楽しくなるのではないかと想像しました。

このような、個人と個人が楽しくつながる4年ぶりの集いが大盛況だったという話はほかに

24-02_54- 発想松田3P.qxd 24.1.12 11:21　ページ 56

も聞きました。以下のメール文も、ご本人の了解を得て紹介します。

「ご無沙汰しています。神奈川県綾瀬市立中央公民館事業担当の伊倉です。今年度だがしや楽校の担当です。10月28日（土）に令和5年度だがしや楽校が開催されました。

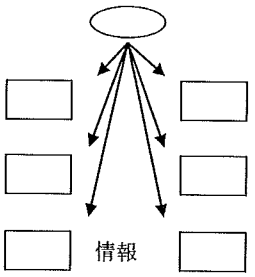
4年ぶりの全体での開催となり、新メンバーも加わり、21名のだがしや楽校生で賑やかに行われました。当日、市内で別のイベントが開催されており、来場者が少ないのではと心配しましたが、親子連れ、友人同士、ご夫婦でと老若男女、約120名の来場者で賑わいました。当方のFacebookに掲載されましたのでご覧ください。

今後とも、綾瀬市のだがしや楽校を温かく見守っていて下さい。」

ほかにも、山形県南陽市の若者の居場所でも、4年ぶりにだがしや楽校を開いたところ、下足箱が一杯になり、子どもたちが「またしたい」とはしゃいでいました、という話を主催者から聞きました。

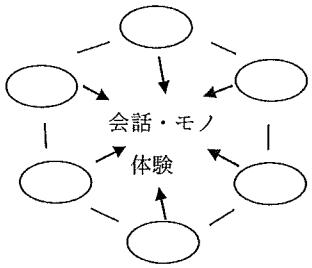
一方通行の場（図2）から、個人と個人がつながる場（図3）へ。人々が求める場づくりをつくり出す熱意ある人々によって、新年度も、地域の顔の見える個人と個人がつながることができる多様な場があちこちにできることを願います。

図2　ステージ型



特定の人が一方通行で伝達する

図3　見せ出し型



個人と個人が自在につながる

「団塊の世代」と言われた現在のシニア世代が子どもの頃は、子どもたちに溢れ、地域のあちこちで子どもたちが遊び回っている光景が見られていたのではないかと思います。そのような子ども時代を過ごしたシニア世代は、現在の少子化の光景をどのように思われているでしょうか？

筆者は、2002年に上梓した『駄菓子屋楽校―小さな店の大きな話・子どもがひらく未来学』（新評論）で、だからこそ、これからは、多くの元気なシニアの方々も積極的に関わって、少ない子どもたちを大切に育み育てていこうという、「老若共同参画社会」、「三世代共同参画社会」を提起しました。

「シニアのお宝博覧会」の最後に、シニアの皆さんの生き生きした「見せ出し」とつながりづくりの様子を参観くださった長野県南信教育事務所生涯学習課長の大内敏樹さんが、「この現場をそのまま学校の昼休み時間の体育館などで行えれば、学校の先生方の負担なく、子どもたちも地域の人々との交流ができるのではないだろうか」と、アイデアを提起くださりました。

世代や立場を超えて、個人と個人が対面でつながることができる場づくりは、まさにこれからが本番ですね。

なお、本文中に紹介した綾瀬市立中央公民館が、文部科学省第76回優良公民館表彰で優秀館に選ばれたと、高木館長さんから連絡いただきました。まことにおめでとうございます！

（まつだ・みちお　個人と個人がつながる場づくり応援します！）
尚絅（しょうけい）学院大学
教授（宮城県）
連絡先：（m_matsuda@shokei.ac.jp）

※本連載、本誌ＨＰに無料掲載中！